2013年度研究助成 研究成果報告書(HP掲載用)

研究課題名： 認知症の人は何をおいしいと感じているのか

所属大学・機関名 山梨大学大学院総合研究部医学域看護学系
健康・生活支援看護学講座
氏名 宮村 季浩

【研究要旨】
認知症の人と認知症でない人の好物について、認知症の人16名、認知症でない人11名に対し、食品の写真を用いた聞き取り調査を実施した。好物として特定できた食品の数は、現在の好物の数は認知症でない人よりも認知症の人の方が多く、過去の好物では逆の結果となった。認知症の人は、現在の好物の数が増えた理由として、こだわりがなくなって何でも少しずつ食べるようになった、よく出されるものが好物になると回答し、現在の食について比較的肯定的な回答が多かった。認知症の人の好物をというと、どうしても過去の好物を食べてもらおうという考えになるが、むしろ新たなおいしさを経験してもらうことの方が生活をより豊かにする可能性が示唆された。

【研究目的】
高齢化に伴い認知症が増加し、特に、在宅で生活する認知症の人の増加は介護上の深刻な問題となっている。中でも食事は介護負担の大きな部分を占めており、認知症の人にできるだけおいしく食べてもらうためのさまざまな工夫が報告されている。はたして、認知症の人は好きなもの、食べたいものを食べることができているのであろうか。本調査は、認知症の人に対する食品の写真を用いた聞き取り調査より、認知症による好物の変化について明らかにする。

【研究方法】
対象は、東京都在住の在宅で介護を受ける高齢者で、インタビューに回答が可能で介護者が同席できる人とした。インタビューは、研究者が自宅に訪問し、食品の写真を見せながら好物について行った。インタビューは、情報が飽和するまで2～5回実施した。また、必要に応じて介護者からも情報を得た。本調査では、食べておいしいと感じるかより、インタビューの時点でおいしいと思うもの、食べたいと思うものを回答してもらい、それを好物として検討を行っている。
研究は、山梨大学医学部倫理委員会の承認（受付番号：1191 平成26年5月14日）を得ている。

【研究結果】
対象者は、アルツハイマー型認知症13名、レビー小体型認知症2名、脳血管性認知症1名および認知症でない11名の計27名（男性10名、女性17名）である。年齢は66歳か

ら99歳で、介護度は要介護1～要介護3であった。認知症でない人の介護が必要になった原因疾患は、脳血管疾患4名、心疾患2名、骨粗鬆症とそれによる骨折・変形性関節症2名、呼吸器疾患1名、原因疾患なし（加齢）2名であった。認知症の診断は、主治医の診断に基づいている。

好物として特定できた食品の数は、認知症の有無で比較すると、過去の好物の数は、認知症の人が4.31±3.26（平均±標準偏差）品、認知症でない人が8.82±5.36品で認知症でない人の方が有意に多かった。現在の好物の数は、認知症の人が6.06±3.11品、認知症でない人が3.64±2.34品で認知症の人の方が有意に多かった。認知症でない人は、現在の好物の数が減った理由として、食に対する意欲がなくなった、料理ができなくなって関心がなくなったなどと回答していた。一方、認知症の人は、現在の好物の数が増えた理由として、こだわりがなくなって何でも少しずつ食べるようになった、よく出されるものが好物になると回答していた。例外としてレビー小体型認知症の2名は、幻覚や味覚の変化で現実との区別ができず、食について考えられなくなり、好物の数が大きく減少していた。

【考察】

認知症でない人は、過去の好物とそれにまつわるエピソードがとりとめもなく出てきて絞り込むことができず、現在の好物についてはあまり積極的に考える気力がないといった感じで、なかなか好物を絞り込むことができなかった。当初の予想に反して、認知症の人よりも認知症でない人の方が現在の生活の中に占める食の重要性が低く、好物が生活の中であまり大切に感じられないのではとの印象を受けた。認知症でない人の方が認知症の人に比べて現在の好物の数が有意に少ないこともこの傾向を示しているのではないかと考える。認知症でない人が現在の好物の数が減った理由として、食に対する意欲がなくなった、料理ができなくなって関心がなくなったなどをあげている点について、これらの問題はむしろ認知症の人の問題と認識されることが多いが、本調査では認知症でない人にとっても大きな問題であることが示唆された。なお、本調査における認知症でない人は、疾患等が原因で要介護の状態となった人であるため、健常な高齢者についてはさらなる調査が必要である。

認知症の人については、過去の好物についてのエピソードがなかなか出てこなかったが、それと関係なく現在の食については比較的肯定的にとらえているようで、現在の好物の数も増えており、こだわりがなくなって何でも少しずつ食べるようになった、よく出されるものが好物になるとの回答からも、生活の中での食の重要性が増しているようである。認知症の人の好物をというと、どうしても過去の好物を食べてもらおうという考えになるが、むしろ新たなおいしさを経験してもらうことの方が生活をより豊かにすることにつながる可能性がある。

【結論】

認知症の人は現在の食については比較的肯定的にとらえているようで、認知症でない人と比べ生活の中での食の重要性が増している可能性がある。